

令和3年度 読書推進フォーラム

見て、聴いて、読んで、本の世界に親しもう！

～人生を豊かにする読書との出会い～

概要



令和3年度 読書推進フォーラム 概要

1 テーマ

「見て、聴いて、読んで、本の世界に親しもう！～人生を豊かにする読書との出会い～」

2 趣 旨

子供から大人まで年齢に関係なく、読書の楽しさや素晴らしさを実感するとともに、地域全体で読書について考える機会をつくる。

3 主 催

和歌山県教育委員会

4 対 象

図書館関係者、公民館職員、学校教職員、行政関係者、子供の読書活動に関わる方など、本や読書に興味のある方はどなたでもご参加いただけます。

5 期日及び会場

(1) 日 時 令和4年2月26日(土) 13:30～16:40

(2) 【主会場】和歌山県民文化会館 大ホール

〒640-8269 和歌山市小松原通一丁目1番地 (TEL: 073-436-1331)

【サテライト会場】①和歌山県立情報交流センターBig-U 研修室4

〒646-0011 田辺市新庄町 3353-9 (TEL: 0739-26-4111)

②東牟婁総合庁舎 3階大会議室

〒647-8551 新宮市緑ヶ丘 2-4-8 (TEL: 0735-21-9637)

【オンライン配信】 YouTubeによるライブ配信(要事前申込)

6 申込者数 453名

主会場: 206名、サテライト会場①: 6名、②: 13名、ライブ配信: 228名

7 日 程

(1) 朗読と講演 「読む喜び、聞く幸せ」

講 師 アナウンサー 山根 基世 氏

(2) アトラクション 「大人も子どもも元気になる！おはなしの世界」

出 演 清泉女学院短期大学准教授(道化師・紙芝居実演家)

塚原 成幸 氏

(3) シンポジウム 熱く語る「読書文化が根付く和歌山をめざして」

コーディネーター 和歌山県社会教育委員会議議長 藤田 直子 氏

シンポジスト 有田川町長 中山 正隆 氏

大阪体育大学教授 岸田 正幸 氏

フリーアナウンサー 笠野 衣美 氏

(前出) 塚原 成幸 氏

13:00 13:30 :40 15:00 :10 :40 16:35 :40

受付	開会	朗読と講演	休憩	アトラクション	シンポジウム	閉会
----	----	-------	----	---------	--------	----

開会あいさつ

和歌山県教育委員会 教育長 宮崎 泉

みなさん、こんにちは。

読書推進フォーラムを開催したところ、たくさんの皆様に参加いただきありがとうございます。コロナウイルス感染症の影響で、会場を満席にすることなく、オンラインでも参加していただいているということで、ありがとうございます。



さて、和歌山県教育委員会では、「読書を楽しむ習慣づくり」を推進しています。どんなところでも、いつでも読書をするのができ、大人から子供まで読書を楽しむということが本当に大事だと思っています。また、読書は気持ちや心を活発にし、豊かにするものだと考えています。その意味でも、本日講演をしていただく山根基世様は、最適な人物だと思っています。

山根様は、ご存知のように、日本を代表するアナウンサーです。アナウンサーにとっては憧れの存在であり、皆様方にとって大好きな存在であると思います。朗読をとおして「子どものことば」を育てることを目的に、地域づくりとことば教育を組み合わせた活動を続けておられる方でございます。本日は『ごんぎつね』の朗読を聞かせていただけるということで、大変楽しみにしております。

続いて、アトラクションということで、塚原成幸様に登場いただきます。塚原様は、道化師や紙芝居実演家として全国各地で活動されています。また、臨床道化師（クリニックラウン）としても、小児病棟を訪れ、子供たちに笑顔を届けています。紙芝居や朗読などの「おはなし」とおして、子供とのより良い関係をつくる大切な手立てについて、実演をもとにお話をしてください。

そのあとのシンポジウムにつきましては、和歌山県に読書文化が根付くためにはどうしたらよいのだろうか、また、子供たちの言葉の力をつけるためには、私たち大人がどのような手立てをすればよいのだろうか、ということについて、各界で活躍されている方々からご意見を伺えたらと思います。

本フォーラムが皆様方にとって実り多いものとなり、それぞれの地域に持ち帰り、各地での読書活動がより一層充実することを願っています。皆様方のご健康とご多幸をお祈り申し上げます、挨拶といたします。

本日はどうぞよろしくお願いたします。

朗読と講演

「読む喜び、聞く幸せ」

アナウンサー 山根 基世 氏



【朗読】『ごんぎつね』新美南吉・作

教科書に掲載されている作品として有名な『ごんぎつね』には、雑誌『赤い鳥』に掲載される前の原稿があることをご存知でしょうか。

今回はその原稿を朗読していただきました。

<多様な読書体験と「声の力」>

- 活字で読む物語と、人に読んでもらう物語は別のものである。

「誰かに読んでもらう、読んであげる」体験もひとつの読書の形になる。

- 「声の力」は声の裏に滲み出る心にある。

声には必ず心がくっついてくる。

声で物語を伝えること、それを聞く子どもは幸せである。

「聞く」読書の体験がその人の生涯を支えるものになる。

- 読書は楽しく、喜びをもたらすものである。

喜び、楽しみを知らずにいるのはもったいない。

大人自身が喜び、楽しみを味わっている場面を見せていくことが大事である。



<「幸せ」とは>

- 何のための読書なのか？

子どもが「自分らしい」と納得できる、自分の人生を切り拓く力を養うための読書。

読書がどう人生の幸せにつながるのか、を考えることが大切である。

人を幸せにする要素は「良き人間関係」に尽きる。

- 「良き人間関係」とは？

心の通う人と人との関係こそが幸せである。

人を幸せにするのは、人と心を通わせる「ことばの力」。

<子どもたちの「ことばの力」を育てる活動>

- 地域の人との体験を通して人間関係を学ぶ仕組みが必要である。
周囲の人とのつながり方や、どうふるまうべきかを、大人との活動の場で学んでいく。
朗読指導者養成講座では、地域での活動の中心になってくれる人を育てる。
子どもが幸せに生きるためのことばを小さなころから聞かせられるようにしたい。

<感謝の力と謙虚な心>

- 自分が一番正しいと思い込む傲慢な人が周囲を不幸にする。
周囲の人に対する尊敬の念が、人を幸せにする。
感謝すれば謙虚になる、謙虚でなければ良い関係はつukれない。

<500年に一度のことばの危機>

- 家族の関係も変化してきている。
家庭での団らんは自分のスマートフォンを見ながらになり、目の前の家族と心を通わせず、スマホの向こうの人と心を通わせようとしている。

山根様には、読むことだけでなく、「声を聞く」という読書体験もあること、声や言葉に込められた力について、御講演いただきました。読書は、周囲の人との良好な関係を築くための「ことばの力」を養い、良い人間関係は、人生の幸せにつながる、というお話は、読書推進の目的を再認識できるものでした。

子供たちの「ことばの力」を育てるために、大人がどのような環境を整えていけるのか、ひとつの可能性として「学校という場を核とし、住民同士の絆が深まる」ことをめざす、きのくにコミュニティスクールの仕組みの活用があります。

学校・家庭・地域が一体となって子供の育ちに関わっていけるよう、引き続き取組を進めてまいります。

アトラクション

「大人も子どもも元気になる！ おはなしの世界」

清泉女学院短期大学准教授

道化師・紙芝居実演家 塚原 成幸 氏



【アトラクション】「大人も子どもも元気になる！ おはなしの世界」

- 読み聞かせや紙芝居を始めるまでに、どのような時間をつくるか
- 紙芝居は日本発祥（1930年～）の「お芝居」
舞台があり、演者はお話を「演じる」
- 子供たちの「聴きたい」思いを引き出し、環境を整えること
子供の言葉に大人がどう対応し、演出するか
投げかけた言葉に反応がないと寂しいのは、大人も子供も同じ
- 『あんもちみつ』（童心社）脚本：水谷章三 画：宮本忠夫
- 昔話の作品に入ってもらうための「何あれ？」と思わせる導入
- 紙芝居の場面と言葉には意図があり、それに合わせた動きが必要
言い方・抜き方を少し変えるだけで、子供の反応は変わる
子供には、平面であっても世界に没入し、風を感じる感性がある
- 『みんなでたいそう』（童心社）脚本：新沢としひこ 絵：長谷川 義史

シンポジウム

熱く語る「読書文化が根付く和歌山をめざして」

コーディネーター 藤田 直子 氏

シンポジスト 中山 正隆 氏 岸田 正幸 氏
笠野 衣美 氏 塚原 成幸 氏



(1) はじめに

【藤田コーディネーター】

- 物語の世界に引き込まれる山根先生の朗読、貴重なご講演にどっぷり浸り、塚原さんの楽しい紙芝居に心ワクワクした。言葉がもつ温かさ、言葉がもつ大切な意味を感じた。
- 和歌山県社会教育委員会議は、県教育委員会の諮問機関として設置されている。県教育行政の事業・企画に対して意見を述べ、教育委員会に助言する役割がある。今期の審議テーマ「県民の読書文化の醸成 ～生涯にわたって読書に親しむために～」について、これからの和歌山を背負う子供たちに読書文化を根付かせることが核となることから、大人はどう動き、どのようなしかけを用意するか議論している。
- シンポジウムをとおして課題や社会教育委員会議の議論を共有したい。行政、学校教育、家庭教育、社会教育、幼児教育といった観点で、シンポジストから取組のヒントを提供していただきたい。

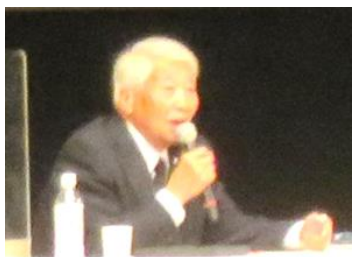


(2) 自己紹介と講演の感想

【藤田コーディネーター】

- ご自身の自己紹介とともに、ご講演の感想もお聞かせいただきたい。
- 有田川町長 中山正隆さんは「絵本のまち 有田川」を展開している。

【中山氏】



- 和歌山県の中心部にある有田川町は、平成 18 年、3 町（吉備町・金屋町・清水町）の合併により誕生した。ミカンと山椒の生産量が日本一である。平成 26 年「こころとまちを育む読書活動推進条例」を制定し、心豊かな人々を育み、元気で文化的なまちづくりをめざしている。

- 幼少時の人間形成のため、文字に親しむことが重要と考え、絵本を通じた子供との交流の場づくりを進めてきた。
- 全国的にも取組が評価され、平成 30 年に第 12 回高橋松之助記念「文字・活字文化推進大賞」を受賞した。

【藤田コーディネーター】

- 町内の子供たちの子育てをコンセプトにした「絵本のまち」を全国にも発信している様子をご紹介いただいた。
- 大阪体育大学教授 岸田正幸さんは、長年にわたって和歌山県の学校教育を引っ張ってこられた。

【岸田氏】

- 高等学校教諭、県教育委員会を経て、大学教員に。「子供が自分の考えを言語化できる力をつける授業（読書経験）」の必要性を感じてきた。小学校低学年からの国語教育に力を入れたいと考え、国語教科書の研究、小学校現場で教育の在り方を考える活動を継続している。
- ご講演から学んだ2つのこと
「読書は自分の人生を考える力をつくっていく」
「言葉は幸せを呼ぶ人間関係をつくる力をもっている」



【藤田コーディネーター】

- フリーアナウンサー 笠野衣美さんは、本日の司会進行。言葉を生業とし、県の社会教育委員会議のメンバーでもある。

【笠野氏】

- アナウンサーとして30年以上言葉と対峙してきた。
ジャンルにとらわれない読書の経験は、相手の立場や自分が経験していない部分を想像する力を磨くことにつながる。
- 声になりや人間性がにじみ出ることを実感している
「声に心がくっつく」の言葉通り、これまでの積み重ねや、そのとき感じている思いが表れる。
- 山根先生の声、空気の振動を生で感じる事ができて幸せである。



【藤田コーディネーター】

- 清泉女学院短期大学准教授 塚原成幸さんは、楽しい紙芝居を演じてくださった。

【塚原氏】



- 道化師と大学教員を兼務し、幼児教育科で児童文化論を担当している。
遊びが苦手な大人が多い印象があり、遊びをとおして子供とコミュニケーションをとれる先生を育成したい。

- なぜ「道化師」をしているのか。
大人は他人との違いを指摘しがちであるが、見方を変えると「違い」は「オリジナリティ」。違いを活かした生き方が「道化師」である。
- 言葉は嘘をつかない。
身体表現も含めて、動きや言葉に人柄や人間性が表れる。人を理解するための言葉の扱いを考えたい。

【藤田コーディネーター】

- 塚原氏は、個性を大事にして、言葉以外の表現方法も使って人と付き合っていくことを考え、子供に伝えていける大人を育成する活動を続けている。
- 38年の教職経験から、「子供は学校だけで育てるのではない」を実感している。
地域で子供が豊かに育つ様子を目の当たりにしてきた。
これからは地域に返していく番であると考え、朗読・読み聞かせボランティアの活動をしている。
- 子供が納得できる生き方をするために読書は有効である。
読書文化そのものがゴールではなく、読書をとおして生きる力を育てていきたい。

(3) 今の子供たちの状況や言葉の力について

【藤田コーディネーター】

- 子供たちの読書文化を醸成するための取組は、読書文化がゴールではなく、読書文化をつくるのが言葉の力、生きる力につながることを共通理解したい。
そのうえで、今の子供たちの言葉の力についてご意見を伺いたい。

【塚原氏】

- 読書が苦手になるきっかけはいくつかある。
 - ・親自身が苦手
 - ・本のある空間に行く習慣がない
 - ・大人の尺度で選んだ本の押しつけや、「読みなさい」の強制
 - ・字が読めるようになったら子供に任せきり読むことに関心があっても、命令や強制があると、抵抗感につながる。
- 会話が少なくなることで、語彙力が少なくなってしまう。
語彙が少なく理解が追いつかなくなると、本から離れることにつながる。
言葉と読書は切っても切り離せない関係である。

【藤田コーディネーター】

- 親子関係の中で読書が大事だというのはよく知られている。
大人からの与え方、しかけ方に義務感がある読書活動では、読書文化や言葉の力につながらない。

【笠野氏】

- 当たり前の本がある環境が重要である。
思い出に残る、応接間の百科事典や図鑑・文学全集、まちの小さな本屋など、大人の本をのぞき見る楽しさがあった。
- 今の子供たちの環境は、テレビやアニメ、スマートフォンがあるのは自然なこと。
会話がなくても過ごせる社会になり、単語でコミュニケーションが成立してしまう。
若者の言葉が貧困になっていることに、大人の責任があるのではないか。
子供のころに会話がどれだけでできているかが大切だと感じる。
- 近所の人ときちんと話せる子との違いはどこにあるのか、気になっている。

【藤田コーディネーター】

- 若者の語彙が少なくなっている現状には、大人と子供のふれあい・会話の少なさが影響している可能性がある。

【岸田氏】

- 言葉の力は豊かな言語環境でしか育たない。
 - ・どれだけ多くの人と会話するか（「会話のシャワー」を浴びること）
 - ・どれだけ多くの本や活字と接するか（「活字のシャワー」を浴びること）
- 学校では意図的に本にふれる環境をつくっている。
教科指導との関連性では、480冊以上の図書と出会う機会がある。
本を読む習慣をつける時間を設定し、活字にふれる機会をつくる。
多様な取組はできるが、子供が自然に本に手を伸ばすようにすることが難しい。
- 幼児期に多様な読書経験ができる環境を、学校・家庭・地域の連携でどうつくっていくかが重要である。

【藤田コーディネーター】

- 山根先生のお話では、学校は「パブリックなことば」の力を教わる場であり、それ以外の「心を通わせることば」の部分は地域・家庭で担っては、という提案があった。
- 学校でしかけを考えることもできるが、家庭・地域で育つ言葉の素地も重要である。
- 言葉の力の育ちを媒介するのが本の力かもしれない。

【中山氏】

- 生まれたときから刺激の多い今の子供たちに、どう言葉の力を育てるかを考え、「自分の力で本を読み、いきいきとした生活を創造し、しっかり考える人」をめざした取組を進めている。
- 「絵本のまち 有田川」では、有田川ライブラリーの環境整備や人材の養成で、全国的な評価も得られるようになった。
- 「ずっと住みたいまちづくり」のためには、行政の財政措置も必要である。

【藤田コーディネーター】

- 有田川町では、子供たちの読書文化をつくり、子供の言葉を育成をしながら、健全に成長させていく枠組みがつくられている。
学校教育・社会教育・家庭教育がそれぞれの役割を担うだけでなく、連携をとりながらうまく進めていきたい。
行政の財政措置ができている有田川町の取組はいいお手本になる。
このメッセージをぜひ各地方でも受け取っていただきたい。
- 子供の言葉の力は「多くの大人とのふれあい」「多くの本との出会い」の中で育つ。
子供たちの言葉の力はこの2つの育ちで築かれていく。
県民の読書文化が根付いていくためのキーワードはここにあると考える。

(4) 参加者に伝えたいこと、今後のヒント

【藤田コーディネーター】

- 「多くの大人とのふれあい」「多くの本との出会い」という視点から、最後に一言ずつ、参加者に伝えたいこと、ヒントとなるようなことを伺っていきたい。

【笠野氏】

- 読書に関わる皆さんが努力を続けている。
全国の都道府県立で唯一、休まずに開館を続けた和歌山県立図書館のように、関係者の努力がある。
大人がつくる、子供を取り巻く環境が大切である。
- 人の流れが変わる、新しい図書館の形が出てきた。
本があって、心地よく過ごせる環境が県内のあちこちにあるといい。
まちのあちこちで本を手にとれる「どこでも本棚」の実現を望む。
- 大人がさまざまなスタイルで楽しんで読書する姿を見せたい。

【岸田氏】

- 幼児期から親子で一緒に読書ができるしかけをつくりたい。
「よみかたり」など、地域が関わり、幼児期から言葉にふれる機会をみんなで一緒に
なってつくることを考えたい。
- 公共図書館がこれからのキーとなる。
「学生の学びの場」から「地域住民の憩いの場」へ変わっている。
公共図書館も子供の読書習慣を支える存在になってほしい。
- フィンランドの公共図書館では、司書が、子供に読書習慣を身につける自覚と責任を
持ち、さまざまな働きかけが行われている。

【中山氏】

- 山根先生の「地域の子供は地域で育てる」はそのとおりである。
「悪いことをしたら地域の人から怒られる」というシステムが以前はあった。
そんなつながりのある地域をもう一度つくりたい。
- 親子の絆が失われてきている。
絵本の読み聞かせをきっかけに、深いつながりをつくっていきたいと考えている。

【塚原氏】

- 児童文化に関わって、この10年で絵本の世界は劇的に変わった。
大人も絵本と出会い、どう活用していくかが読書推進のキーになると考える。
- 子供の本質や感性は変わっていない。
興味関心や感性、残酷さやピュアな部分は変わっていないはずだが、大人のつくる環

境が変わったことで、変わって見える。
大人が意識を変え、どう行動していくかが大切である。

【藤田コーディネーター】

- 子供の言葉の力や読書文化を考えたとき、大人がまず何をすべきか、たくさんのヒントがあった。
和歌山の子供たちが 10 年後、20 年後、親になったとき、読書文化が根付いた、家庭やまちで、心豊かな幸せな生活が維持できていることを願っている。

令和3年度 読書推進フォーラム

見て、聴いて、読んで、 本の世界に親しまおう!

～人生を豊かにする読書との出会い～

令和4年 2月 26日 土
13:30～16:40
和歌山県民文化会館 大ホール
(和歌山市小松原通1-1)
入場無料

読書の楽しさや素晴らしさをもう一度実感し、
地域全体で子供たちの言葉の力を育てることに
ついて考えてみませんか？
本や読書に興味のある方は
どなたでもご参加いただけます。
(託児あり：要事前予約)

「読む喜び、聞く幸せ」
アナウンサー
山根 基世氏
13:40～

「大人も子どもも元気になる！」
おはなしの世界
滝安女子学院短期大学准教授
(現代語・現代文担当) 塚原 成幸氏
15:10～

「読書文化が根付く和歌山をめざして」
熱く語る
コーディネーター 和歌山県社会福祉協議会 藤田 直子氏
倉敷 康太郎氏 有田川町長
大塚 体育大学 教授 フリーアナウンサー
清泉女子学院短期大学准教授
塚原 成幸氏 笠野 衣美氏
岸田 正幸氏 中山 正隆氏

シンポジウム 15:45～

問い合わせ・申し込み 申込め切：2月21日(月) 電話・FAX・メールでお申し込みください。

和歌山県教育庁生涯学習局 生涯学習課
☎ 073-441-3720 FAX 073-441-3724

主催：和歌山県教育委員会



「本物の力は凄い。」

フォーラムを終えるなり、私のスマホには、参加された様々な方からの SNS がどんどん到着していた。その中で、私が何より嬉しかったのは、「よかった」「すごく勉強になった」「時間があっという間で、もっともっと聞きたかった」という感想と共に、「明日から、私は・・・のように動く」といった「子どもの読書文化醸成のために、大人ができること、動くこと、仕掛けること」の具体的な一歩を踏み出したいという決意がたくさん届いたことである。これは、私達和歌山県社会教育委員会議メンバーがこのフォーラムのねらいとして掲げていたことでもあった。

閉会時、玄関ホールで会場参加者を見送った事務局の方からは、いつもの会合とはひと味違う、参加者の笑顔と満足感、そして、感謝の声がたくさん届いたとの報告も受けた。

日本一の朗読者と言われる山根基世さんが、ここ和歌山で、新美南吉の不朽の名作『ごんぎつね』を読み、自らの子どもへの仕掛けをその思いと共に魅力的な声で語り、いとも贅沢な時間と助言をいただき、児童文化・児童福祉に裏打ちされた塚原さんが紙芝居を演じ、そして、県内各分野で先頭に立って「子ども育成」に取り組む皆さんが、その活躍の内容や和歌山に読書文化を根付かせるための思いをそれぞれに熱く語る。

盛り沢山の内容を盛り込んだために、少々窮屈な時間設定であったことは申し訳なく感じたが、参加した方々は、本物と出会った感動の中で、自らを内省し、今までの経験を次の知恵に繋げていく、まさに、「リフレクション」のあるフォーラムとなり得たのではないかと思う。

ある若いお母さんは、山根先生の素敵な朗読を聴きながら、自身が子ども時代に聞いた母の声を思い出し、「そう言えば、小さい頃、お母さんはたくさん絵本を読んで聞かせてくれた、懐かしい」と振り返る。思春期以降、逆らうことの多かった娘時代を経て、今、母となって幼子に向かっている自分の姿を改めて顧み、絵本の力と母親としての責任を実感していた。

また、高等学校で国語教育に携わる教員は、「ことば」「読書」について、そして、「人生」「生きる」ということについて、改めて考えることのできた1日を振り返った。

山根さんの生の朗読に心を揺さぶられながら、講演で氏がおっしゃった「ことばには必ず心がくっついてくる」ということに納得し、人の心を満たすものは、人の心しかないこと、また、ことばの力が心を通わせることのできる力となることを痛感していた。そして、子どものことばの教育を担う者として、「自己主張の苦手な日本人に論理的な国語の力をつけることも必要であるけれども、隣の人と心を通わせられないことで、幸せではない子どもたちがいるという視点をいただくことができた。そのような視点で、ことば、国語、子どもたちをみることができているように思う。」と自らの心の内を届けてくれた。

彼女は、その後のシンポジストの意見からも、「大人ができることは何なのか、地域で子どもを育て、活字・ことばのシャワーをたくさん浴びせ、そしてその子たちが親になったときには、読書文化が根付いて人々が生き生きしている町ができるのではないかと、シンポジウムが終わったときにはなんだかわくわくしていた。」と話す。職場に戻り、フォーラムに参加できなかった仲間に今日の感動を話したくてうずうずし、何人もの人に話し、内容を共有したと言う。

さらに、彼女は、次のようにも述べた。「わくわくした気持ちとはうらはらに、今まで教師として、自分が何もしてこなかったのではないかと、恥ずかしくもなりました。もっとできたことがあったのに、大人として、国語の教師として、しっかり考えてこなかった。子どもたちに読書文化を根付かせる仕掛けについて、これだけの人が、真剣に議論され、子どもたちを幸せにしようというお姿を目の当たりにし、情けなくもなったのも本音です。」

こうした彼女の力強いリフレクションは、「一足飛びにはいかないかもしれないけれど、自分ができることをやってみようと思う」という新たなステップを生み出している。

コロナという未曾有の災禍の中にもかかわらず、東京、長野からわざわざお越しくださり、素晴らしいパフォーマンスをいただいた山根基世先生、塚原成幸先生、本当にありがとうございました。また、県事務局のご努力と山根先生をはじめとする出演者の皆様の温かいご協力により、リアル会場、サテライト会場、YouTubeLIVE 配信という三者の展開が実現できたことを感謝いたします。そして、会場にお越しくださった皆様、オンラインで参加して下さった皆様、感想をお届けくださった皆様の、積極的なご理解とご協力にも、深く感謝申し上げます。

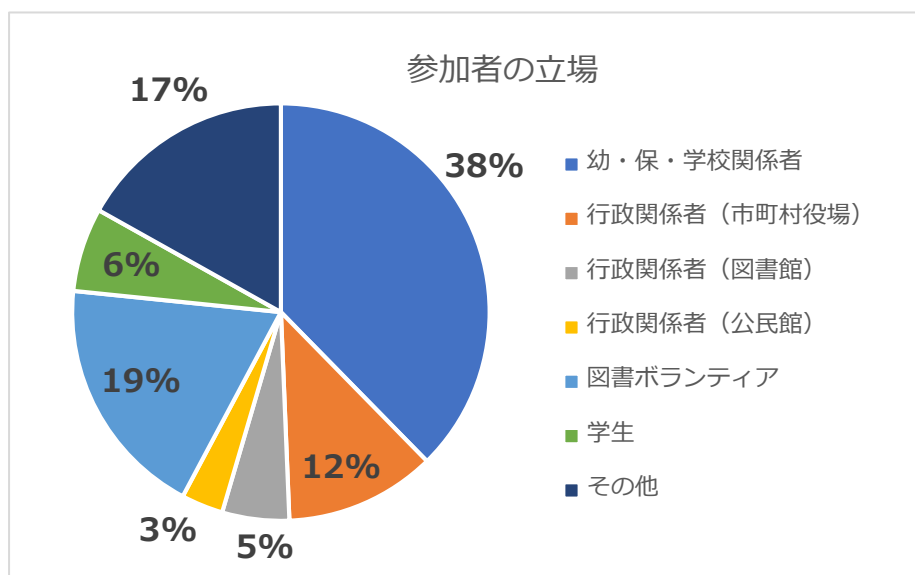
このフォーラムの中で、私自身も、温かい人間関係を維持し、一人一人が充実した生活を営むために、言葉の力、声の力がどれだけ大きいかということを再認識させていただいた。絵本への信頼性はますます大きくなっている。

和歌山に暮らす私達大人が、読書文化構築のため、それぞれの立場、それぞれの位置で地道な工夫を重ねることによって、子どもたちが豊かな言葉の使い手となり、幸せな人生を歩んでいけることを願ってやまない。

アンケート集計

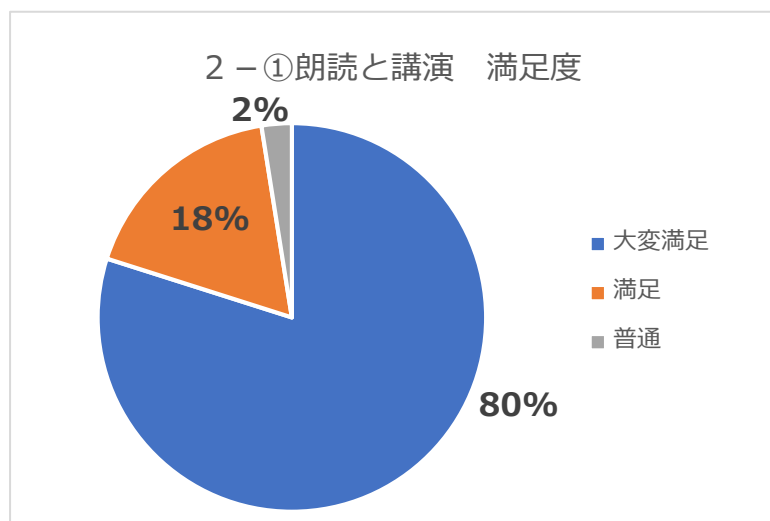
(回答数：203 通)

1 本日のフォーラムにはどのような立場で参加されましたか。



2 本日のフォーラムの感想をお聞かせください。

①朗読と講演



○自由記述（一部抜粋）

【朗読について】

- プロの朗読の世界に引き込まれました。
- 朗読の声のトーン、スピード等すべてにおいて心に沁みました。
- 静かなのに、心が動く時間でした。
- 『ごんぎつね』は今まで何度も読んできたけれど、聞き手になるとまた違った印象・感想を持つものだと思います。
- オンラインでしたが、人物の心やその変化がひしひしと伝わり、頭の中に3Dで立ち上がる映像…。一編の映画を観るようでした。ドン！という場面では、パソコン画面から波動が伝わってきました！驚きです。声の力で相手の心を包むということがどういうことか、自分自身で経験できました。

- 山根先生の朗読に触れ、人に物語を語ってもらう時間の豊かさを改めて感じました。「読み聞かせ」という疲れた大人にも響く幸せな時間を、日本の恵まれた子供たちだけでなく、世界中の様々な環境にいる人々が味わえる平和な場所を、つくり保ち続けなければ…と思います。
- 普段深く意識せず使い、耳にしている「ことば」の力や素晴らしさについて認識を深めることができました。研ぎすまされるような気持ちとワクワクするような気持ちを同時に体験させていただきました。

【講演について】

<言葉が育む豊かな人間関係>

- 読書は何かの力を身につけるためではなく、子供たちが幸せな人生を歩むためのもの、というお話が印象的でした。
- 「人の幸せは良き人間関係に尽きる」そして読書が人と心を通わせることができる力（言葉）を育む、という話が印象的でした。
- 私が、読み聞かせボランティアをしようと思った原点。それは、子供たちが本と出会い、その楽しみを知り、人間関係を築く上で、大切な何かをつかみ取ってほしい。そのために、読書の習慣をもってもらいたい、という思いからでした。今日の講演をお聞きして、その気持ちに自信が持てるものとなりました。これからも活動を続けていきたいと思います。
- 本と出会うかどうかで人生が変わる、という内容が強く心に残りました。2児の子育てをしています。子供の言葉の吸収力に驚く毎日です。絵本から、自分の感情や欲求を表す適切なフレーズを吸収し、それを活用しながら人間関係をつくりあげていく。そうやって、知識を得るだけではなく、人と人とをつないでいくのに読書習慣が影響するのだと感じました。
- 「言葉の力」は、「考える力」であるとともに「人との関係を結ぶ力」であることを痛感しました。また、子供たちが「よき社会の形成者・構成者」として活躍ができるよう、私に何ができるのかをよく考えたいと思います。

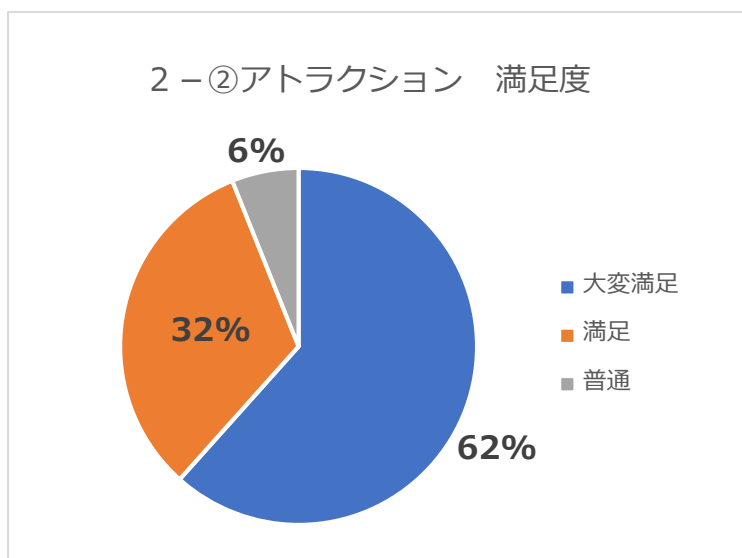
<地域で子供を育てる>

- 「家庭・学校と共に地域で子供を育てる」というお話に合点がきました。
- 人の心に寄り添い、人を理解できる子供を地域で育て、見守ることの重要性を感じました。
- 学校と家庭では子供は育たない、全くその通りで、地域ネットワークが今後も鍵になると感じました。
- 人と心を通い合わせることができる、読書や地域の環境を大人が責任を持ってつくることで、未来の子供が豊かな言葉を獲得し、地域の中で関わりを持ちながら幸せに暮らしていけるのだなあと思いました。
- 生きてゆく上で大切な言葉を言えるかどうかで人生が変わる、地域の多くの人たちの中で子供たちが言葉を学ぶ仕組みづくりが必要、心に残った言葉のひとつです。
- 子供が自分で自分の人生を切り拓いていくために大切な話し言葉の獲得の重要性と、それを育てるために学校・家庭・地域が連携する必要性を改めて考えました。

<デジタル時代と言葉の危機>

- 本をじっくりと読むことを通して、自分との対話をするんだなと感じました。じっくりと対話することができるのは、デジタルではなく、本の良さだなあと改めて感じています。
- スマホ時代が及ぼす言葉の危機は、読書を通じて克服していかなければならないと思います。
- 「声に心がくっつく」なるほどと思いました。誰かに本を読んでもらう素晴らしさはこの点にもあるのですね。「ネット言葉があふれていて、世界の言葉が変わっていく」「即反応で熟慮、推敲、検証が疎かになる」とおっしゃられたことも印象に残ります。それだけに、文字とふれあい、読むことによって学んだり考えたりすることの大切さを再確認できました。この相反するかのような2つの世界ですが、読書の楽しさを子供たちに感じてもらいたいと改めて思いました。

②アトラクション



○自由記述（一部抜粋）

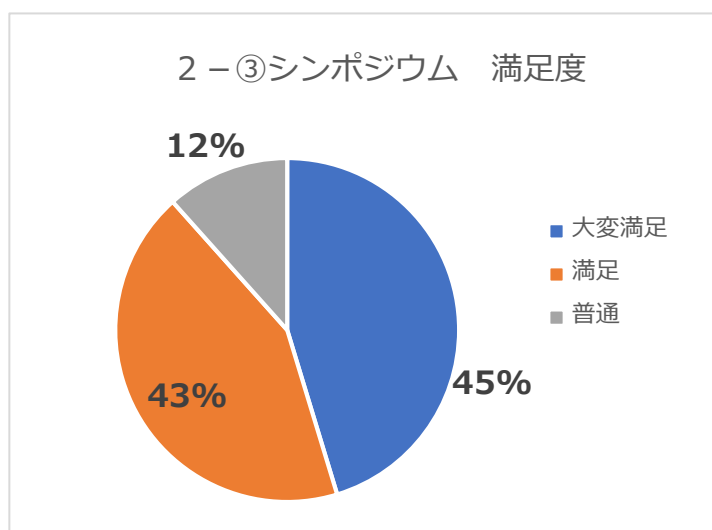
【紙芝居と演者の工夫】

- 今まであまり紙芝居になじみがありませんでしたが、日本発祥であることや、演じ方を教えていただき、おもしろいと感じました。
- 紙芝居を自分でも演じたいくなりました。演じる基本や楽しさを伝えていただきました。
- 紙芝居は絵と言葉が噛み合うように作られていることを初めて知りました。子供たちが楽しんで紙芝居や絵本を味わうためには、演者や読み手の工夫が必要だと学びました。
- 紙芝居のもつ楽しさから、お話の楽しさや、山根氏の言っていた「声」の力を大変感じた。話の中に入りこんでその世界を味わえること、というのも読書に通じる魅力だと思った。
- 子供たちが聞きたくなる環境を整えるのが大人の責任、という言葉が印象に残りました。
- 場を巻き込む力は社会教育にとって大変重要なことだと思うので、お手本にさせていただきたいです。
- 塚原先生の子供を惹きつけるポイントを学ばせていただき、私たちの仕事にも活かせると思います。
- オンラインでの参加させていただいたので、子供も一緒に拝聴しました。紙芝居の内容を完全に理解してはいなさそうでしたが、話し手の声のトーンや間から考えて、わからない部分を補完している様子が伺えました。インターネット上で簡単に動画が視聴できる時代ですが、人を介してストーリーを知る良さがあるな、と改めて感じました。

【コミュニケーションの仕掛け】

- 大人の私も自然と笑顔になり、気がつけばお腹から笑っていました。はやく見たい、もっと見たいと思う仕掛けがたくさんありました。コミュニケーションの仕掛けについて考えることができました。
- このようなパフォーマンスを和歌山の学校現場でもやっていただきたいです。教員が学べばそれを子供たちの前で行うこともできます。
- 子供が何か言ったらリアクションをすることは、そのとおりだと思った。
- 紙芝居に入る前に子供たちの「聴きたい」という環境を整えること（子供とのやりとりの中から言葉を取り上げて返すなど）心を通わす言葉や声のあり方を学んだような気がいたします。
- 子供に集中させるためには、始める前の遊び（つかみ）も大事だということがよくわかりました。大人でも同じで話にすぐに入るのではなく、それまで惹きつける、リラックスさせることも大事だと思います。
- お話の中で「子供には平面の絵に没入できる感性がある」と聞いたことが印象に残りました。

③シンポジウム



○自由記述（一部抜粋）

【言葉の力の育成】

- 大人は人の違うところを指摘すると言うお話にはドキッとしました。指摘して正していく事が育てていくと思っている大人は多いのではないのでしょうか。人との違いを活かす、オリジナリティという言葉がとても心に残りました。
- 幅広い世代の人との関わりや数多くの本との触れあいが「言葉の力」を育てていくことを学びました。この学びを生かして、子供たちの言語化する力を育てていきたいと強く思いました。
- 子供と大人の会話、子供と本との出会い、大切に考えたいと思います。
- 見聞きしたこと、気がついたこと、好きなものをきちんと言葉で伝えられるように、「読む」だけでなく「他人が理解できるように語る」場面が子供たちには必要なものかもしれないと思いました。
- 学校教育に携わる立場として、生きる力の礎となることばの力を子供につけるための仕掛けをどのように読書と絡めていくかを考える契機となりました。
- 子供のことばを育てるには、やはり、学校教育、家庭教育、社会教育が連携しつつそれぞれの役割を果たすことが大切であることを改めて感じました。まずは、自分に何ができるか考えることから始めてみます。
- 話し言葉としての「会話のシャワー」、書き言葉としての「活字のシャワー」にあふれた環境整備が大切なことについてよく理解することができました。

【今後の取組】

- 「スマホを片手に」をなんとか「本を片手に」に変えたい。
- 本を読むことがゴールではなく、生きる力へとつなげることが大切だということを改めて感じました。
- 学校・社会・家庭が一体として、子供が自主的に本の楽しさに触れる取組を進めていく必要がある。
- 学校教育の中だけでは子供の読書活動は難しく、幼児期から、また地域ぐるみで大人の姿をより良くしていくことが大切だと改めて思いました。
- 言葉の力は、生きる力の重要な要素であり、その育成を図るために読書の果たす役割は大きく、読書文化を醸成するために、家庭・学校・地域が協働して取り組むことが大切だと思いました。
- 自分の考えを言語化できる子供を育て、言葉によって幸せを呼ぶ人間関係が築ける大人を増やしていくために、地域全体で関わっていったら本当に良いなと考えさせられました。
- 子育てに関わるのは学校や、社会、地域はもちろんですが、保護者だけでなく、子育てをしていない世代の人たちの力を得られればいいのになあと感じました。

3 和歌山県に読書文化をより一層根付かせるために、一番大切なことはどのようなことだとお考えですか。ご意見をお聞かせください。

【大人の姿】

- 親が本を読む姿を子供に見せること。
- 大人が今日のように、読書文化や言葉の大切さを再認識する機会が、様々な場所、タイミングにあることの大切さを思いました。改めて、大人が気づき、どう変わるかが大切だと思わせてもらいました。
- 自分が読書体験を楽しみ、得た経験を伝えることだと思います。
- 本を、大人も子供と一緒に楽しめる環境。
- 自由に本を選び、読める環境をつくっていくこと（マンガや図鑑はダメなどと制約をかけずに）。
- 大人がゆとりをもつこと。日々の暮らしを楽しんでなさそうな大人の言葉は、子供にはなかなか届かないのではないかと思います。
- まず親が子育ての中で子供と向き合う姿勢の大切さを認識することから始まると思います。「今しかできないこと」を子育ての中で考えながら、大人のスマホ依存を改めていくべきだと思います。

【環境づくり】

- 子供たちの言語環境を整えていくことの重要性を教えてくださいました。そのために、学校図書館、図書室を整備するための予算と、図書館司書、学校司書をどの学校にも配置していただきたいです。また、読み聞かせボランティアの人たちと学校との交流を増やすことだと思います。
- 幼児期からいつでも身近に本を手にとれる環境と人との会話。
- 小さいころから「本」「言葉」（話す）が身近にある状況をつくる必要があると思います。
- 子供も大人も身近に絵本を気軽に手に取って見られるとうれしいですが…。
- 大人が意識的に子供たちの生きる土俵に立って、読書文化へのアクセスを考える感性こそが、もしかしたら子供たちは嬉しいかもしれませんね。地域の中で豊かな会話体験を大切にするとともに、様々なメディアを活用し、誰もが読書の機会にアクセスできる、誰もが読書文化から取り残されない世の中だと良いな一と思っています。
- 地域に開かれた、憩いの場としての図書館。図書館に行けば、好きな本と出会えて、ほっとして帰って来られる。小さな子供が居ても気兼ねなく通える場所があることが、読書習慣の一番のスタートになると思います。

【人的環境】

- 司書教諭など、学校の中で読書に触れる機会や仕掛けを考える人を置くこと。
- 「地域のカ」というキーワードが多く出てきましたが、「地域」を動かす「キーマン」は必要。「キーマン」を育てる機会があれば。
- 人のカ。人を地道に育てていく。
- 子供の読書活動に関わる大人一人ひとりが、家庭で、保育の場で、学校で、地域で、もう少し「おせっかい」になったらいいのかもしれないと思いました。

【地域の姿】

- 地域の書店の活性化。
- 大人の責任、地域の責任を考え直したいと思いました。
- 子供を育てるのは、学校だけでも、家庭だけでも地域だけでもない。いろいろな場をどうつくるか、何かやろうとしたときに、「いいね！」と協働できる関係がたくさんあると良いですね。

4 その他、お気づきの点がございましたらお書きください。

【オンライン配信について】

- コロナで人が集まりづらかったこと、大変、大変残念です。もっとたくさんの方と共有したかったです。
- せっかくの読書推進フォーラムですが、新型コロナウイルスの影響で、会場を一杯にすることができず残念に思いました。ただ時間超過が残念です。
- オンライン視聴で参加しました。会場へ赴くより、参加のハードルが下がって、とてもありがたかったです。今後もこのような形式で続けて頂けたらと思いました。
- 内容が大変良かったので、たくさんの人たちが参加できる周知の仕方を再考してください。
- このような素晴らしいフォーラムの情報がもっと広く広報され、行き届けばと思います。
- 毎回和歌山市や田辺市に行くのは大変なので、状況関係なく、今回のような開催をしてもらえたらな、と思いました。
- オンライン配信がなければ、今日は病院へ行くか、フォーラムに参加するかの2択でした。おかげでどちらも叶いました。コロナ禍が生んだ副産物のオンライン、もっと広まるといいですね。

【カメラアングル】

- 会場設営の関係で難しかったのかもしれませんが、塚原先生の講演とシンポジウムは正面からの映像を見たかったです。
- コロナのこのような時期に、家でこのような講演を聞く機会をいただきありがとうございました。カメラの位置など考えていただけたらもっと良かったと思います。

【アーカイブ配信】

- 今日の山根先生の講演をもう一度聴くことができるように、アーカイブ配信を希望します。また、今日の講演を地域の生涯教育の講座等で、取り扱いができるといいと思います。
- はじめてオンラインにて講演会に参加しました。コロナで会場参加したかったです。再配信希望です。
- 今日の講演をDVD化して、保護者会等で活用してもらえるように各学校に配布していただきたい。

【プログラム構成】

- アトラクションにもう少し時間が欲しかった。
- オンラインでの参加でしたが、会場での参加が不可能でしたので、大変良かったです。ただ、白熱したのか、少し時間的に長かったように思いました。
- 終了時間は、きちんと守って欲しいです。
- 子供たちのためのこのような企画もあればおもしろいと思いました。
- 感動あり、笑いあり、学びあり、気づきあり、のメリハリの効いたプログラム構成で、最後まで居眠りする事なく楽しませていただきました。

【今後の取組】

- 和歌山県の読書環境が今どの位置にあって、どこに伸びしろがあると考えられるのか、何を達成したのか、俯瞰的で市民にも伝わるわかりやすい情報を知りたいと感じます。その上でフォーラムの紹介があれば、参加する意欲が湧きますし、例え参加が叶わなくても、学びや行動のきっかけにつながると思います。できれば、HPなどインターネット上に専用のページがあって、フォーラムの変遷が分かったり、今までの取組を辿れるようになっていたらと思います。付近の地域で受けられるサービスには何があるのか、地域でどういう取組があるのか、学校教育の整備状況など整理されていたらと思います。
- 「どこでも本棚」実現してほしいです。